幻の道都・旭川の記憶

遠軽医師会
JA北海道厚生連遠軽厚生病院
柳川（やながわ）　伸幸（のぶゆき）

インバウンドの影響とはいえ、札幌での宿泊代が信じられないほど高騰している昨今、北海道のはずれに居を構えている者にとって、札幌という街をつい遠く感じてしまうのは、筋違いなのか。私は生まれも育ちも旭川だが、そういえば、私が幼い頃―昭和40年代から50年代ごろの旭川では、大人たちが札幌のことをあまり良く言わない空気があったように思う。父は旭川、母は空知の出身だったが、親戚の集まりや近所の会話のなかで、「札幌はなんでも自分たち中心だ」といった言葉を何度か耳にした。

もちろん、そうした人々がすべて、かつて旭川が道庁の移転候補地だったことや、上川離宮という壮大な構想があったことを知っていたとは思えない。ただ、どこかに「本当は旭川にもそれだけの価値があった」という、誇りと悔しさの混ざった感情が、街の空気の中に漂っていたように感じる。それは単なる地域間の対抗心ではなく、歴史が生み出した記憶の名残だったのかもしれない。

実際、旭川は明治時代、北海道の行政の中心地として道庁を誘致する構想が真剣に検討された都市だった。1909（明治42）年、札幌にあった道庁庁舎が火災で焼失したことをきっかけに、道庁移転論が持ち上がり、その有力候補として挙がったのが旭川である。

当時、旭川は屯田兵村の設置や陸軍第七師団の進出といった国家的プロジェクトを背景に、急速に発展しつつあった。さらに注目されたのが、広大な御料地の存在である。御料地とは、明治政府が皇室財産として管理した特別な土地で、上川離宮の構想に伴い、現在の神楽岡、緑が丘、西神楽、隣接する東神楽町一帯など、忠別川と美瑛川に挟まれた台地が指定された。これらの土地は、軍事や農業のみならず、将来の都市機能を担う場として高く評価されていた。

さらに、旭川の御料地には、明治天皇の北海道巡幸に備えた「上川離宮」の構想が進められていた。上述の清らかな２つの川に挟まれた豊かな自然環境に、離宮用地が整地され、植樹や測量も行われたとされる。この計画は明治天皇の崩御により中止されたものの、皇室の離宮候補地となるほど、旭川が国家的に重視されていた証といえるだろう。

しかし、このような旭川の台頭に対して、札幌をはじめ小樽もが強い警戒心を抱いた。すでに官庁、大学、鉄道網などを整備しつつあった札幌にとって、道庁の移転は都市の命運を左右する問題であり、新聞や政界では強い反対の声が巻き起こった。このとき築かれた対立構造は、その後、両都市間の感情的な軋轢を生むことになる。

結局、道庁は札幌に再建され、旭川への移転案は幻となった。札幌はその後、北海道の圧倒的な中枢都市へと発展し、旭川とは人口も経済規模も大きな差がついた。今日の旭川市民には、一極集中の現実を受け入れた上での諦念がある。一方で、札幌市民の多くにとっては、旭川はもはや競争相手ではなく、意識の外にある存在なのかもしれない。

それでも、かつて御料地として皇室の名のもとに整備され、上川離宮の構想を託された土地の記憶は、旭川にとって静かな誇りであり続けている。整然とした都市設計、豊かな自然、北海道のほぼ中央に位置するという地の利とともに、その記憶は今も静かに生きている。かつて「もう一つの道都」として期待された都市の姿は、過去にとどまるものではない。北海道が多極型の未来を模索する時代において、旭川の持つ可能性は、再び注目されるべき価値を秘めているのではないだろうか。

私自身、現在は別の地で暮らし働いているが、旭川に帰るたびに心が和み、自然と肩の力が抜ける。街の景色や空気、歩く速度までが身体に馴染んでいるのを感じると、「ああ、自分はやっぱり旭川が好きなんだ」と素直に思う。歴史に刻まれた夢と記憶が、今の旭川に静かに流れ続けていることも、その愛着の理由なのかもしれない。